

令和2年1月23日 第63号

柳川郷土研究会  
季刊誌

# 瓦版

発行所 柳川郷土研究会  
柳川市大和町栄1078-3  
発行人 武末十治男  
編集責任者 金子俊彦



## 火 無言の説法

生後わずか三日の命だった。よほどお産の状況が悪かったのか、不眠不休の看護にもかかわらず家族の願いも空しく短い生涯を終えた。若い母親が医師や看護婦の必死の看護に対して

深い感謝の意をあらわすと、

「私たちに云う前に、亡くなった赤ちゃんに敬礼を云ってあげてください。貴女の母体を救うために身を捧げたのですから。この次はもつと体を鍛えて、お産に備えてあげてください。」とさとされた。

実家の母親からも厳しく云われていたことが、今さらのように身にしみみて、気ままに過ごした身の不徳をしみじみと悟った。

ささやかであったが、お通夜もし、野辺の送りをした。身近な人たちが馳せ参じてとどこうりなく済ますことができた。彼女は予想もしていなかった人たちの心の暖かさをはじめて知った。

なぐさめられて流す涙は、我が子を失った悲しみもさることながら、人の心の暖かさに対してであった。彼女はそれに泣いたのである。そうした人々に囲まれて生きていくことに気付き、その有難さをかみしめていた。

そうして「この次は立派に生もう」と決意した。僅か二日あまりで、これ程までに人の心を導く自信は私にはない、赤子はそれをやってくれた。しかも一言も発することなく。

一般的な考え方(武末十治男)

我が子を亡くして悲しみもさることながら人々の親切に感謝の気持ちで涙流せる事は大変立派な事だと思えます。そんな気持ちをもち続けながら生き続けたいものです。